

平安時代に於ける宗教的自覺過程

藤
島
達
朗

目 次

一 序	二五
二 叡山佛教に於ける人間自覺過程	二七
——彌陀信仰の展開——	
三 貴族の淨土教	三〇
附 所謂雜信仰について	三九
四 武士の彌陀信仰	四一
五 庶民の信仰形態	四六
六 結	五二

一 序

佛教が、我が民族精神の成長又は社會狀態の歴史的變遷そのものゝ中に、不離の關係をもちながら、思想として、信仰として、その獨自なすがたを現はし出すのは、平安時代に醸成され、擡頭した淨土教を以て最初とせねばならぬ。それは、正しく民族の具體的な生活表現として打ち出された、最初の佛教思想信仰である。

由來、淨土教信仰の基盤は、ひろい意味に於ける人間劣機の反省自覺にあるといはれる。併しこのやうな自覺は、特別に存するものではなく、それは人間成長の全體的過程に相應する。この故に淨土教の發生及びその變遷の問題は、たゞに佛教史的な關心に於けるのみならず、國史全體にかゝる興味ある問題として、種々に検討され、明かにされねばならぬものをもつてゐる。即ちこのやうな觀點にたつて、以下、平安時代に於ける淨土教特に西方信仰發展の具體相をながめ、以て、その自覺過程を明かならしめようと思ふ。

二 叡山佛教に於ける人間自覺過程

——彌陀信仰の展開——

叡山に於ける淨土教の母胎は、常行三昧堂であるといはれる。いふまでもなく常行三昧堂は、止觀業四種三昧中の一、常行三昧を行修する場所である。この叡山に於ける常行三昧堂は、傳ふる所によれば、圓仁によつて、承和十五年（八四）、唐より歸朝後建立せられ、仁壽元年（八五）より、五臺山念佛三昧の法を以つて始修せられたといふ（山門堂舎）。

平安時代に於ける宗教的自覺過程

このことは、堂宇の始源並に常行三昧法に、五臺山念佛三昧の法を用ひたといふことを示すものであつて、必しも常行三昧法そのものが、圓仁に始まるといふことを語るものではない。もと／＼四種三昧は、止觀業を、身儀の異なるに約して、分類したものであり、共に等しく實相の正觀である。傳教大師の當時にあつて、よし、その各々の堂宇は存せずとも、一應、これらが行はれたと考へることは、當然のことではなければならぬ。併し大師は生前九院、十六院を建立すべく、その點定を了したといはれるが（九院佛閣抄等）、四種三昧院に關する限り、その生前になつたものとしては、弘仁三年（八二）七月上旬建立といふ、半行半坐三昧堂なる法華三昧院（法華堂）と、同九年（八三）に、圓仁によつて完成された常坐三昧堂なる一行三昧院（文殊樓堂）が、みへるのみである（山門堂舎、觀岳要記上）。なほ大師は四種三昧を諸弟子に配し、圓仁に常行三昧を遺囑したと諸書にみへるが、「山門堂舎」、「觀岳要記」等によれば、さうでなく、右の常坐三昧であり、圓仁は、これについて、弘仁九年（八三）七月、命をうけ、同九月、これを完成、自らこの三昧に入つて、六年間修行したといふ（因みに傳教大師の歿期は弘仁十三年である）。即ち右のやうな事實を一應信する限り、大師にあつては、半行半坐三昧所謂法華三昧と常坐三昧が、特に重視されたと考へてよからう。もつとも「摩訶止觀」卷二に依れば、四種三昧には、別修と通修があり、別修の際は、前者の本尊は普賢であり、後者のそれは文殊であるが、通修の時は、すべて阿彌陀一佛となり、別修の場合でも、常坐三昧は、支那天台荊溪湛然以來、阿彌陀佛を本尊となすことに、變はつて來てゐる。

さて我々は「守護國界章」の

當今人機皆轉變、都無ニ小乘機、正像稍過已、末法太有レ近

の文字より、大師の時機觀をうかゞひ得るのであるが、更に早くその「願文」をよむ時、そこに最も深刻な大師の人

間反省の事實に接することが出来る。

悠々三界、純苦無不安、擾々四生、唯患不樂也、牟尼之日久隱、慈尊之月未照、近於三災之危、浚於五濁之深、加以、風命難保、露體易消、艸堂雖無樂、然老少散曝於白骨、土屋雖闇進、而貴賤爭宿於魂魄、瞻彼省己、此理必定、仙丸未服、遊魂難留、命通未得、死辰何定、生時不作善、死日成獄薪、難得易移、其人身矣、難發易忘、斯善心焉、是以法皇牟尼、假大海之針妙高之線、喻沉人身難得、古賢禹王、惜一寸之陰半寸之暇、歎勸一生空過、無田得果、無有是處、無善免苦、無有是處、伏尋思已行迹、無戒竊受四事之勞、愚癡亦成四生之怨、(中略)於是、愚中極愚、狂中極狂、塵禿有情、底下最澄、上違於諸佛、中背於法皇、下闕於孝禮、(下略)

このやうに、先きの如き彌陀を本尊とする行法に於いて、又その時機觀に於いて、充分彌陀信仰を大師に考へる基盤を、み得るのであるが、併し、確實に大師の上に、それを指摘することは出来ない。その歿するや淨土院の地に葬られた。その堂は「山門堂舎」に依れば

傳教大師所定置一也

といふが、續いて同書にみへる「齊衡六年七月十六日、慈覺大師座主時、移大唐五臺山竹林寺之風、始修淨土院廟供」の記事より考ふれば、堂又恐らくは圓仁の頃になつたものであらう。

二

さて、圓仁については、周知の如く、承和五年(八三)入唐し、同十四年(八四)に歸朝してゐるが(慈覺大師傳)、翌十五年歸山すると、東塔虛空藏尾に前述の如く、常行三昧堂を建立した。そして仁壽元年(八五)、五臺山念佛三昧の法を

平安時代に於ける宗教的自覺過程

諸弟子に授けて、永く未來際を期せしめたといふ（山門堂令、
叡岳要記上）。五臺山念佛三昧の法とは、同山竹林寺に行はれる五

會念佛で、法照によつて、はじめられた五會に分つ緩急曲調ある唱念佛法である。圓仁は開成四年（承和六年
八三九）に五臺

山を訪れ、竹林寺に詣でてゐるばかりでなく（入唐求法
巡禮行記）、その「入唐新求聖教目錄」にも、法照の「法事儀讀」一巻

が、のせられてゐる。元來常行三昧は、所謂般舟三昧で、「般舟三昧經」に基き、七日乃至九十日間、常に行道し、

現前に阿彌陀佛を觀する三昧であるが、「摩訶止觀」卷二上によるに、その口業の方面では、

九十日身常行施無_レ休息、九十日口常唱_二阿彌陀佛名_一無_レ休息、九十日心常念_二阿彌陀佛_一無_レ休息、或唱念俱運、或

先念後唱、或先唱後念、唱念相續無_レ休息時、若唱_二彌陀_一、即是唱_二十方佛功德等_一、但專以_二彌陀_一爲_二法門主_一、舉_レ

要言_レ之、歩々聲々念々、唯在_二阿彌陀佛_一。

といひ、更に意業でも西方阿彌陀佛を念ずる、即ちその三十二相も觀じて空假中の三觀を修し、我心法に約就して三

千三觀の理を念するのであるといふ。かくて所謂三諦の妙理を觀じ、

不_レ貪_二著色身_一、法身亦不_レ着、善知識一切法、永寂如_二虛空_一。

の境地に到る即ち教相の妙解を妙行する、あく迄もそれは天台の實踐法である。然るに圓仁が新建の常行三昧堂に於

いて行ふべく規制した、所謂五臺山念佛三昧の法は、右の如く法照の五會念佛であり、これは、いふまでもなく善導

流の欣淨土の行業である。しかも前者が身口意三業の念佛といひながら、その中心とする所、意業であるに對し、後

者は、あく迄口唱に終始する不斷念佛行である。

こゝに至て、我々は圓仁の「寂光土記」中の、次の文を想起せざるを得ない。

嗟呼微塵法界、一毛端亦是法性妙土、一念三千、已心中豈非_二實相之寶處_一耶、其國融通如_レ是矣、我等具縛凡夫、

何日得_レ入焉、我聞西方有_二淨土_一、名曰_二極樂_一、此是同居之寂光也、若生_二彼土_一得_二無生忍_一者、法性土非_レ遙乎

我等具縛の凡夫、何れの日に此土に入るべき、我西方に極樂ありと聞く、これはこれ同居淨土の寂光である。もし

彼土に生れて、無生忍を得ば、法性眞如の土、あに遙かなるものあらんやといふ。圓仁は、貞觀六年_(八六)正月十四

日に歿したが、傳によれば、その最後、西に向つて焼香合掌し、先づ諸佛菩薩名を唱へて、これを念じ、次いで諸弟

子と共に阿彌陀佛を念じ、手に印契を結び、口に眞言を誦して遂に遷化したといふ_(慈覺大・師傳)。即ち圓仁の五會念佛の

將來は、彼此思ひ合す時、單なる模倣でなく、彼自らの自覺と反省の、そこに動くものあつたことを考へずにいら

ぬ。止觀業の常行三昧にて證し得ず、此土にして、遂に妙果を得ること能はざる具縛の凡夫としての自己發見が、そ

こにあつたといふのは、いひすぎであらうか。

併しながら、五會念佛法の採用により、常行三昧が直に西方往生行におきかへられたと速斷することは出来ない。

共に彌陀を中心とする般舟三昧に出でる行法であり、身口意三業の深密な常行三昧を、修し易い口稱法たる五會念佛

にかへたので、それはそのまゝ、やはり止觀業の意味を失ふものではない。たゞ我々はその採用の底意に、圓仁の西

方願生心のあつたことを、認めたいとするのみである。

「具縛凡夫」の言葉は、圓仁にあつては、むしろ環境的に語られてゐると考へしめるものが多い。即ち此土の惡條

件をはなれて、彼土に生れ、而して無生忍を得ば、法性の土豈遠からんやで、彼土のよき環境と、素質にめぐまれ

て、修道・成佛の道をすゝめようとするものである。

併し、とにかく、それによつて常行三昧の方向が、五會念佛そのもののもつ性格より、自ら西方願生に向ふべく、

又それによつて叡山全體に西方淨土の信仰が基礎づけられることとなつたのは、注目すべく、それは山上に於ける劃

期的な事實であつたといわねばならない。

そしてその基盤に、此土と人間に對する反省が、よし、その程度はひくゝとも、そこに存することを認めようとするものである。

三

圓仁門下の相應は、貞觀七年(八六)八月、師の遺囑によつて不斷念佛會を始めたが(叡岳要記上)、爾來、それは八月に行はれて、所謂「山の念佛」となつた。次いで元慶七年(三八)、相應は更にそれまで虚空藏尾にあつた常行三昧院(東塔)を、これ又遺命によつて講堂の北に移した(堂舎要記)。相應は無動寺を開き、所謂回峰行の創始者として知られるが、延喜十八年(九一)十一月二日、その臨終にあたつて

燒_レ香敬_レ花、面向_ニ西方_一、口稱_ニ彌陀_一(拾遺往生傳下)

の行儀を示して入滅してゐる。

西塔の常行三昧堂は、寛平五年(八九)の創建であるが(堂舎要記)、それについて「堂舎」は、翌六年八月より不斷念佛會を行ひ、延長五年(九二)二月、増命によつて四面柱に極樂淨土の圖がかゝれたといひ、「要記」では、寛平五年の創建は、その増命の與るところであり、翌々七年より念佛を始むといつて、兩書時期その他につきやゝ小異がある。

横川のそれは、下つて座主良源の時、康保五年(九六)二月廿九日、法華堂と共に方五間の常行堂が完成し、その行法を開白してゐる。そしてその前一と月、正月廿八日に常行三昧僧十四口を置くとの官符が出てゐる(堂舎要記下)。

かうして圓仁歿後百年にして、三塔に悉く常行三昧堂をみることが出来るやうになつたわけである。なほこの風潮は從て諸大寺に及び、二年後の天祿六年(九七)には、多武峰や、遠く伊豆走湯山にも、それゝ建立されてゐる(多武)

峯略記、走。
湯山緣起。

この間、座主は、安慧、圓珍、惟首、猷憲、康濟、長意、増命、良勇、玄鑒、尊意等は、所謂圓珍門流で、この系統には、西方信仰はみられない。即ち全體を通じて往生人と考へられるのは、安慧、増命、延昌、良源の四人である。

安慧については、貞觀十年(八六)四月三日、その歿するに臨み、左手には與願印、右手には寶印を、それ〴〵に結んだとあるのみで、別に記す所はないが(拾遺往生傳上)、増命については、やゝ記事がある。即ち延長五年(九二)十二月十日、その命終せまるや

人生有_レ限、本尊導_レ我、汝等不_レ可_ニ近居_一
といひ、やがて

禮_ニ拜西方_一、念_ニ彌陀佛_一、燒_レ香倚_レ几、如_レ眠氣止

紫雲自聳、音樂遍_レ空、香氣滿_レ室

であつたといふ(往生極樂記)。

この増命の弟子に運昭があり、運昭の門より千觀が出た。はじめ園城寺にあつたが、日想觀に便ならずとて、攝津の、或は安滿に、或は箕面に住した。その作くる所の「極樂國彌陀和讃」は、ひろく都鄙の老少に唱せられたといふ。永觀元年(九八)十二月に、手に願文を握り、口に名號を唱へて入滅してゐる(往生極樂記)。

延昌は、有名な空也の師である。受戒以後、毎夜尊勝陀羅尼百遍を誦し、毎月十五日には、諸僧を請じて彌陀讃を唱せしめたが、平素、命終の期に先じ、三七日の不斷念佛を修し、その結願の日に往生するといつてゐたといふ。又

往生せんと思はゞ、衆生のために法華經百部を寫すべしとの夢告を得て、これを行つた。天徳二年^(九五)十二月廿四日、門弟に命じて三七日の念佛を修せしめ、年明けて十五日正しく往生した。この日沐浴して淨衣をまとひ、彌陀、尊勝の兩像を安置し、絲を佛手につけ、これを牽いて息絶へたとある^(往生極樂記)。

市聖空也は、この延昌について受戒した^(天曆二、九四八)。併し空也の念佛勸進の活動は、それ以前の沙彌時代である。特に京都に入つてのそれは、天慶元年^(九三)であつた。稱名念佛をすゝめて、ひろく天下を巡歴し、念佛の民衆化につとめた功績は偉大である。極樂記にみへる

天慶以往、道場聚落、修念佛三昧、希有也、何況小人愚女多忌之、上人來後、自唱令他唱之、爾後舉世念佛爲事、誠是上人化度衆生之力也

の文は、この間の消息を我々に告げるものである。

良源は、慈慧僧正、元三大師の稱によつて周知である。山門にあつては、その中興者であり、圓仁門にとつては、以後その門流を重からしめた存在であるが、叡山の淨土教も、その出現を機として殊に盛んになつた。先述の横川に於ける常行三昧堂の建立も、正しくこの時である。

傳によれば、夏臘十二、三年にして菩提心を發して隱遁し、跡を幽谷の間にくらまさんとしたが、老母堂にあるによつて暫く塵巷に交わるといつて居り^(慈慧大僧正傳)、その發願文^(山門堂舍)には

少病少惱 無知死期 臨終正念 一心念佛 十念成就 無始罪障 念々消滅 彌陀觀音
來迎引攝 決定往生 極樂世界 聽聞妙法 得無生忍 十方世界 利益衆生 下化得證

無上菩提 南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

と述べてゐる。寛和元年（九八五）正月三日、その臨終にあたつては

合掌對_レ西誓曰、我所_レ修善根、悉資_ニ菩提、兼廻_ニ向衆生、命終之後、必往_ニ極樂、口唱_ニ彌陀、心觀_ニ實相、寂而入滅

以上、その淨土教の自覺と、台門一流の念佛思想を、みる事が出来るが、良源には、「極樂淨土九品往生義」の著があつて、最も具體的にその志向をうかがうことが出来る。同書は、天台大師の觀經疏によつて、觀經の九品往生義を註釋し、併せて彌陀の四十八願を説くものである。その中心點、往生の行としては、定散二善のうち、定善の觀佛三昧でなくてはその力なしといひ、十八、十九兩願を比較しては、十九願の修諸功德の行人は、臨終來迎の益あるも、十八願にはなく、それはわづかに十念によつて、逆謗を除く有罪の凡夫の往生を許すのみであり、即ち十九願すぐれたりとする。三心具足せば上品であるが、造惡の機は三心具し得ず、即ち十念によつて辛じて下品下生たり得る。この十念は口稱であるが、それは慈心、悲心等の十念であるとなし、この十念が口稱十聲、專心に念じて餘念なければ、自らにそれに具はるとなすのである。即ち稱名も諸行も、共に往生の行であるが、稱名は淺行であり、諸行こそは深妙であつて、これによつてのみ、來迎の勝益を得ることが出来るといふ。所謂觀勝稱劣の立場であるが、併し稱名行がはつきりと往生の因として出される所は、注目にあたいる。たゞ觀念に主體があり、諸行が尊ばれる所には、未だ明かに人間性に對する自負の存するものあるを認めねばならぬ。

四

源信の淨土教については、今更のべる迄もないのであるが、一應「往生要集」によつて、それをあとづける。

その冒頭の序文は、特にひろく喧傳せられる所であるが、我々は、まづそれによつて源信の時機觀を、うかがうこ

とが出来る。

夫往生極樂之教行、濁世末代之目足也、道俗貴賤、誰不歸者、但顯密教法、其文非一、事理業因、其行惟多、利智精進之人、未爲難、如予頑魯之者、豈敢矣、是故依念佛一門、聊集經論要文、披之修之、易覺易行、總有二十門(下略)

と、いつて以下十門を開くが、第一門「厭離穢土」にては、此土人間をふくめて六道の厭離すべきを敍し、第二門「欣求淨土」では、極樂淨土の十樂を數へてその欣求さるべきことを示す。即ちこの土を、はつきり穢土と觀じて、捨離すべきもの、彼土淨土は十樂あつて欣求さるべき所となすが、序文に於ける時機觀と共に、この現世觀は、最も注目すべきものがあり、淨土教の本質的基盤が、漸くにして明かになつたことを思はしめるものがある。第三門の「極樂證據」では、彌陀の淨土を十方の淨土と彌勒の兜率天に比し、その優劣を定める。第四門並に以下の五門にて、正しく往生の業因を明かにするが、その中前四門は念佛往生であり、後の一門が諸行往生である。

さて第四門「正修念佛」では、特に念佛往生の義を説き、これを天親の五念門によつて明かにする。そのうち中心とするのは、觀察門である。正しく台門の立場であるが、これを佛の相好を順逆にかけて一々に觀する別相觀と、佛身の總相を觀する總相觀、極略して白毫相を觀する雜略觀の三に分ち、「隨意樂應用之」とて機の利鈍に配して、これを行はしめんとする。更に

若有不堪觀念相好、或依歸命想、或依引攝想、或依往生想、應一心稱念

と述べて、上の觀想に堪へぬものは、或は佛に歸命するおもいに依り、或は攝取引攝のおもいに依り、更に往生を信ずるおもい、それによつて、一心に稱名念佛せよといふのである。即ち依然天台一流の觀勝稱劣の立場はゆるがな

いが、上根は觀念にて、下根は稱念にて、共に往生の可能を示し、その功に於いて、等しいことを明かにしたのは、劃期的である。

ひるがへつて源信の天台教學史上の地位を考ふるに、その著「一乗要決」によつて、傳教大師以來の三一權實の義趣を、つまびらかにし、一乘佛性の妙義、一切皆成の宗要を顯揚し、以て一乘眞實の法幢を、永く山家の史上に、うちたてたものであつた。この基盤にたつて、天台法華の一心三諦の妙觀が祖述されたが（法華略觀、眞如觀）、その實踐面として、實は先述して來た如く、西方願生の方向が出て來るのである。即ち具體的には阿彌陀の三字を三諦三身三惑に配し、一切諸法は、この三字に攝し盡すとなし（阿彌陀觀心集）、一心三觀、一念三千を以て四土不二の極樂、三身即一の彌陀を觀すべしとする（觀心往生論）。最後の撰述と考へられる「觀心略要集」には、まづその序にて

夫觀心者、諸佛之祕要、衆教之肝心也、故天台宗以爲規模、心地觀經曰、能觀心者、究竟解脫、不能觀者、究竟沈淪云々、當知生死之沈與不沈者、心性之觀與不觀也、爰世迄澆季、人少利根、尋其門者、難究閭奧、挹其流者、罕討淵源、何矧如予愚暗之者乎

といひ、本文に入つて、濁惡の末世、煩惱内に起り惡緣外に引く、たとい發心するもの千萬人たりとも、其志を遂げるものは稀少である、即ち今の時にあつては、淨土の往生を願ふに如かず、彼土に生れば、内外縁とのひ、自ら佛道増進して速かに無上位に上り得る、即ち誠心以て彌陀の寶號を念ぜねばならぬ、阿彌陀の三字は空假中の三諦なれば、名を唱ふると同時に、三觀を修し、以て無生の淨土に生れ得るからである、とのべる。而してこの彌陀を念ずる所に、先きの觀念と稱名が出て來るのである。しかもこの二にあつて一應觀勝稱劣の立場をとるが、難易を論ぜば、稱名爲易である。しかも、予の如き頑魯、愚暗の者にとつては、往生之業は念佛爲本であり、稱名爲本でなければ、

ばならぬとするのである。即ちこゝに至て止觀業の常行三昧の念佛は、その自覺に於て、一轉、善導流の念佛となつたといへる。併しこの稱名たるや、「要集」第七門「總結要行」によれば、大菩提心、護三業、深心、至誠、常、隨願等の諸行を以て、稱名の助成をなすとする所に、後の淨土教との差異がある。

傳によれば、長和二年（一三〇）、生涯の行業を佛に表白したが、それには

念佛二十俱胝遍、奉_レ讀_ニ法華經_一一千部、般若經三千餘部、阿彌陀經一萬卷、奉_レ念_ニ阿彌陀大呪百萬遍、千手陀羅尼七十萬遍、尊勝陀羅尼三十萬遍、及阿彌陀小呪、不動眞言、光明陀羅尼、佛眼等、不_レ知_ニ其數_一、或彫_ニ繡佛像_一、或書_ニ寫經卷_一、或行_ニ布施_一等之事、種々不_レ一云々

とあつたといふ（延曆寺首楞嚴院源信僧都傳）。併し、これらのうちにあつては

薰修行業、何等爲_レ先、答、念佛爲_レ先

といふ如く（同書）、念佛が最も重要であり、先頭に立つものであると示してゐる。

このやうにして圓仁によつて開けた念佛の道は、源信に於ける此土と自己への深い反省自覺により、漸く淨土教の本流にわけ入つたといふことが出來よう。しかもなほ、念佛の外に諸行を認めねばならぬ所に、その自覺の限界と段階があることを、思はしめられるのである。

三 貴族の淨土教

さて我々は、次にこの時代に於ける貴族の西方信仰を一瞥しよう。これについては、かつて井上光貞氏によつて精

書名	日本往生極樂記 (一卷)	續本朝往生傳 (一卷)	拾遺往生傳 (三卷)	後拾遺往生傳 (三卷)	三外往生傳 (一卷)	本朝新修往生傳 (一卷)	計	
編者	慶滋保胤	大江匡房	三善爲康	三善爲康	蓮禪	藤原宗友		
編集年次	寬和年中 (985—986)	康和年中 (1099—1104)	保安四年 (1123)	保延三一 保延五 (1137—1139)	保延五年 以後 (1139—)	仁平五年 (1151)		
僧數	27	26	上卷 29 中卷 11 下卷 23	63 上卷 9 中卷 17 下卷 9	35	33	19	203
尼數	3	2	上卷 中卷 3 下卷 1	4 上卷 1 中卷 下卷 1	2	5	3	19
沙彌數	2		上卷 中卷 1 下卷	2 上卷 1 中卷 2 下卷 1	4	2	1	11
俗男數	5	11	上卷 中卷 16 下卷 3	19 上卷 7 中卷 6 下卷 12	25	10	18	88
俗女數	6	3	上卷 中卷 3 下卷 4	7 上卷 2 中卷 2 下卷 4	8	2		26
計	43	42	95	74	52	41	347	

彩ある敘述がなされた(歴史學研究)。それは「藤原時代の淨土教」と題されたが、むしろ藤原貴族のそれ、それに關する限り、殆どつけ加ふべきものはないが、今は一應、往生傳によつて、これを明かにしてみよう。

往生傳は、日本往生極樂記一卷、續本朝往生傳、一卷、拾遺往生傳三卷、後拾遺往生傳三卷、三外往生傳一卷、本朝新修往生傳一卷の六部で、編集の時期は、寛和元年(四九八)より仁平元年(五一二)の間にわたつてゐる。登載人數は三百四十七人、一應あらゆる階級をふくんでゐるといへる。僧、尼、沙彌、俗男、俗女と分けた人數の狀勢は上の如くである。俗に於ける貴庶の別は、のぞましいことであるが、これを數字化することや、困難であり、今はこれをおいた。なほ六部中には同人の連出するもの三十三人あり、従つて實數は三百を僅かに上まわる位であるが、一應各書の數勢をみるべく、そのまゝでこれを

行つた。又沙門とか法師と題されても、内容に於いて沙彌であるものがあり、それは實際に従つてそれ〴〵沙彌の項にて數へた。例せば極樂記に於ける「藥連沙門」を沙彌に數へる如くである。

二

さて往生傳にあらわれる貴族階級で、最も早いのは、和氣眞綱であり、以下年次に従つてのべてゆかう。

眞綱は清麿の第五子であり、美作守參議右大辨にまで上つてゐる。兄廣世と共に傳教・弘法兩大師の外護者として、天台、眞言兩宗の開創に貢獻する所があつたことは、ひろく知られてゐる。承和十三年(八四)、法隆寺善愷が、事によつて少納言登美直名を訴へたが、直名の盛名をおそれ、明法博士はさげ、人々も正言しない。このやうな世相を深く慨き、遂に致仕して門を閉じ、ひとへに浮世を厭ひ、ひたすら西土を仰慕したが、やがてその年、病なくして卒去した。時の人は皆、これを往生人といつたといふのである(拾遺)。眞綱の西方信仰は、即ち不正邪惡な浮世を厭ふことより起つてゐる。

藤原多嗣の息で、太政大臣良房の弟である良相は、從三位右大臣にまで上つたが、年四十にしてその妻を失つた。爾來娶らず、専ら聖教をよみ、仁慈を施し、一小堂を建て、佛像を安置し、居住人をして觀音の名號を稱せしめた。貞觀九年(八六)十月、死せまるや、軀を扶け起さしめて、西方に正面し、彌陀根本印を結んで奄然として逝つた(拾遺)。良相の場合は、妻の死を契機としてゐる。前代以來の現世的な觀音信仰がうかゞへるが、西方信仰にあつて、前の眞綱と共に、稱名を行つた形跡はみえないやうである。

儒學を以て聞へた參議大江音人は、元慶元年(八七)六七歳で歿したが、その臨終にあつては、尊勝陀羅尼を七遍誦した。併し世人はこれを往生人といつた(續本)。

天延二年^(九七)に死した太政大臣藤原伊尹の第四子義孝は、早く佛法に歸し、平素よく法華經を讀誦したが、命終に及んでも方便品を誦して遂に氣絶へた。友人の夢に現れて極樂國に往生したことを告げてゐる^(極樂記)。

これらでは西方往生に對し、尊勝陀羅尼も法華經も、共に可能なる行業であると信ぜられてゐる。

宮内卿高階良臣は、深く佛法に歸して、日夜法華經を誦し、彌陀を念じたが、病中もこれをやめず、死前三日剃髮受戒した。死するや香氣みなぎり、音樂あり、數日生けるが如くであつた^(極樂記)。

讀誦法華、念彌陀佛、並に剃髮受戒等の善事は、來迎の益を受けるが、念彌陀佛が別に誦法華と異なる所のない一善行であると考へられてゐる。

一條左大臣雅信の第五子時敍は、天元年中^(九八七—九八二)、十九歳で出家し大原に隠れた。爾來、四種三昧を行すると十數年、背に惡瘡が生したが、醫することをせず、往生の好機とて正念に住し、十念を成熟せしめて入滅した^(拾遺中)。義孝といひ、時敍といひ、共に名門であるが、その早い求道出家の理由を知ることが出来ない。ただ二人とも長男にあらず、四、五男であることが注意される。

長徳三年^(九一)に寂した慶滋保胤は、日本往生極樂記の編者である。文人としてその名は一世に高かつた。陰陽家賀茂忠行の二男で、大内記であつたが、少年の時より極樂を慕ひ、彌陀を念じた。康保元年^(九六)、叡山西坂本に勸學會を起したが、四十歳以降、いよゝ西方への志深く、「極樂記」の序によれば

口唱名號、心觀相好、行住坐臥暫不忘、造次顛沛必於是

と。寛和二年^(九八)、入道して寂心と號したが、横川に入つて源信の二十五三昧講に加り、晩年には、東山の如意輪寺に住して、そこに歿した^(極樂記、續本朝)。

このあたりより唱名が出て来る。源信との交渉深く、別相觀を思はす念佛の行儀である。

大江爲基は、參議齊光の二男である。幼少の日より極樂を仰慕したが、藏人を経、攝津守となつて遂に出家、爾來ひたすら念佛した。一旦死したが、やがて蘇生し

唯遺恨也、下品下生耳

といつて再び死んでいつた。

善行によつて往生するとせば、當然その善行の質、數、期間等によつて、彼土に於ける階位が、問題となる。半世念佛にとめて下品下生では、爲基たらずとも遺憾の極みであらう。

蔭子源忠遠の妻は、若年時より慈悲心深かつたが、夫に従つて太宰府に下り、康和三年（一〇一）遂に産後に歿した。その臨終は、正念に住し念佛亂れず、異香特にあたりにみなぎつた。平産を祈つた師僧は、願かなはず死せるを悲しみ、その日、終日觀經を讀み、その託生の處、生前の所願と相違せざるやを問ふた。即ち其夜女あらわれ、今日の讀經有難し、重ねて四十八遍讀誦して給はれ、すれば生を上品に轉することが出来るといふ。では現在は何と問へば、中品下生であると答へたと（續本）。

念佛の數についての好例は、比丘尼妙蓮の事績である。

妙蓮は、もと宮女、四十二歳で落鎗し、爾來ひとへに稱名をつのつた。長承三年（一一四）の秋、共に住む女にいふに、自分には一の願がある。年來小豆を以て彌陀寶號の遍數をつのり、既に一（一本に）石五斗になつた。そこで彌陀佛像を造り、これをその像中に納めたいのであると。即ちその女子ら衣食を節して、これを助け、遂に一尺六寸の彌陀佛と二尺の地藏尊の二體を完成した。所願満足して翌年の正月尼は歿したが、その夏、夢にあらわれて戸口に立つ

た。するとやがて多くの鬼が出て来て、尼を縛し去らんとする、それにも拘らず尼は少しも驚く氣色がない。これを聞ふと、この様なことは度々ある。併しその都度、かつて造り奉つた彌陀佛が我に代つて苦を受け給うので、恐れるに及ばないのであるといつた。夢さめて女子等思ふやう、造像の如き小善で、なほこのやうな大利を得る、況んや年久しく稱念するをやと、これを記した編者三善爲康は、あの後へ、これは往生人ではないが、善根による利益を示さうとて載せたのであると述べてゐる(後拾遺下)。即ちその程度の稱念や二尺にも足らぬ造像の功では、往生は不可能であるが、それでもなほ、よく地獄の苦みは、まぬがれ得るといふのである。

次はやゝ下つた大治五年(三一)に歿して蘇つた前安房守藤原邦忠の話であるが、昨年薨じ給うた白河法皇は、未だ生所が定まらずおわします。それは生前の善業が善趣を引き、惡業は惡趣を引き、兩々かねあつてゐるからであると(三外、大納言雅俊の條)。正しく生所を決するのは、量の問題である。

大江匡衡の二子舉周は、文道名譽の者であつたが、丹後守となつた時、一堂を建てゝ迎講を修した。かくて式部權大輔、大學頭となり、永承六年(四六)に歿したが、死に臨み、式部權大輔大學頭正四位下となり、二代の帝師に任じた生涯は、かへりみて心残るものはないといひ、念佛數百遍、善知識僧を招いて十戒を受け、出家を遂げて瞑目したといふ(續本朝)。

彼にあつては現世は満足、その佛行はひとへに現世の如く來世の幸を確保しようとする所にある。現世が幸であるだけ、未知なる來世が心にかゝり不安なのである。上流貴族に於ける信仰の典型的なるものである。

源高雅の二男である但馬守章任は、美作、丹波、伊豫、但馬の守を歴任し、その巨富を一世に稱せられた。日々阿彌陀經四十九卷を読み、來世の行とするのみで、その外別に堂塔を建てず、佛事を修めず、元來性吝嗇で、國守たり

し時は、その貪婪の故に多くの民をなかしめた。然るに臨終には正念に住し、遂に往生を得た（續本）。編者大江匡房は、そこで

爰知、不_レ必依_二今世業_一、可_レ謂_二宿善_一

といつてゐる。即ち生涯の貪欲は、日々四十九卷の阿彌陀經讀誦や臨終の正念位で、覆はれる筈のものでない。然るに往生をしたといへば、解釋に苦しむ。即ち宿善によるといふより外はないことになる。臨終の正念は、更に時代下れば、それだけで生涯の惡業を消すと考へられて來るが、この當時では一善行とあつかわれるのみであつた。

なほ、源章任にあつても、現世幸福にあり、後世の確保、延長に、その行業があること、前の大江舉周の場合と同様である。

大納言源俊賢の息權中納言顯基は、後一條院の寵臣であつた。長元九年（一〇三六）、帝崩御されるや、所司皆新皇の下に赴いて、梓宮の燈すら明かでない。人心の浮薄を慨いて即ち發心落飭し、大原にこもつて念佛誦經の生活に入つた。永承二年（一〇四七）、背によう疽が出来たが、萬病中、正念に堪へるものは、これよりない、療せずして往生すべしとて、念佛遂に入滅した（續本）。出家の動機をみるべく、臨終正念の重視が、こゝに示される。

延久年中（一〇六九—一〇七三）に死去した外記史生の安倍爲恒は、來迎を得て往生を遂げたと世評高かつたが、平素行業を積んでゐたことを聞かぬので、外記の中原盛兼が、これを親族に問ふと、別にいふほどの行はない、たゞ毎日西方に向ひ、八曼陀羅香を燃して、阿彌陀佛に供養し、これだけは、いかなる急事があつても缺かすことはなかつたと（拾遺）。

大納言源道方の息前常陸守經隆は、老年に及んで出家したが、別に念佛せず、たゞ毎日日輪を拜し、時に經呪を誦した。財物を惜しまず、これを悉く乞者に施すので、人に與へず、佛寺をも造るべしとすゝめたところ、財資は浮雲

の如し、何ぞ惜んでそのやうなものを造らうやと答へた。永保元年(八一〇)二月十日、病を發するや沐浴して彌陀佛前に念誦、西面して臥し、ひとへに稱名をつのつた。最後には、舌もつれ氣つかれ、阿彌の二音をのみ、辛じて唱うるにすぎなかつたが、遂に身心亂れず、眠るが如くに氣絶へた(拾遺)。

右の安倍爲恒、源經隆の平常の行業は、あまり顯著でない。特に經隆は、佛寺の建立を否定してゐるが、この時代の一般は、必しもさうでなく、むしろ反對である。

左近將監下野敦末は、隨身の忙職にありながら、念佛の心をすてず、中年以後は資財を惜まず堂舎を建立し、佛經を書寫した。晩年出家して後は、念佛の外他の營みを忘れ、夜に日をついだ。かくて永長二年(一一七〇)、來迎をうけて往生した(拾遺)。

又前豐前守藤原保定は、中年以後、佛法を求め、伽藍を建立し、丈六の阿彌陀像を造立して、それに安置した。常に名徳を請じて講説を聞き、自らは妙經を誦し、ひとへに念佛を修したが、承徳三年(一一九〇)の夏、臨終せまり、五色の絲を佛手につけ、正念に安住して氣絶へた(後拾遺)。

造寺、彫佛、寫經は、貴族階級に最も盛んであり、普通の行業である。中でも冷泉皇后歡子の如きは、その最も甚しいものといふべきであらう。治暦四年(一一〇四)四月帝に死別するや、それより道心を發して日々法華經一部を暗誦し、大乘經數十卷を轉讀した。小野の邸宅を捨てて寺院(常壽院)となし、爾來毎日彌陀法華の法を修し、逐年五時八教の講筵を開いた。二條亭を賣つて千僧供に施し、日別に法華經五紙を書寫した。往生の業因大佛を造るにしかじとて、遂に丈六像を造建した。康和四年(一一二二)八月十八日臨終するや、本尊の御手に五色の幡をかけ、それを右手にもち、左手に香爐をさし、西に向つて觀念入滅した。その間臨終の邪障を拂ふべく、諸僧を請じ、虚空藏の寶號を

稱せしめ、大威徳法を修せしめたといふ(拾遺中)。

まことにけいんらん多彩な信仰生活であり、藤原貴族に於ける最高度的な信仰表現といふことが出来る。

右の丈六像造立のことは、特に源信の説として、ひろく貴族社會に行はれた。珍海の「菩提心集」には

惠心僧都は丈六の佛を造るをぞ、決定往生の業とはのたまひける

といふが、「三外往生傳」には、直接、源信の言として次の話をのせてゐる。

横川楞嚴院の妙空は、或る時源信に向つて、往生の願あるも、其行を修し得ぬ、いかにすべきやと問ふた。するとこれに對して答へていふに、丈六佛を造立せば淨土に生れることが出来ると。そこで妙空は直にこれを造立し奉つた。今の華臺院の本尊がこれであるといふのである。珍海の菩提心集は、恐らくこれに基くものであらう。

上野介高階敦遠の妻は、天永二年(一一二一)、四十五歳の時、死期せまるを感じ、

吾聞、造二丈六佛像一者、必往二生淨土一

とて、忽ちにこれを彫成した。病を發するや、生前所修の善根を、つぶさに記せしめ、臨終の節、必ず我手に持たしめよと命じ、五色の絲を一方の手に握りながら、命終したといふ(拾遺下)。

丈六佛造立のことはともかく、善根を記して、これを持參するといふ所に、この時代の往生意識が全現してゐる。

三

以上縷々、往生傳によつて、大略年代順に、九世紀より十二世紀初頭にわたる、貴族往生の種々相をのべて來た。即ちこゝに於いて、大凡次のやうなことが言へると思ふ。

前代にみた現世主義の彌陀信仰は、さすがに、その影をひそめ、最も多く後生來世に關するものであること。

その發心は妻子、師主との死別など環境の變化によるもの、次、三男以下の生活上の問題の想見せられるものなどがあるが、併しその大部分は、むしろ恵まれた現世に對し、來るべき世の不安、恐怖であつたといはねばならない。言ひ得べくんば現世の幸福の延長である。このやうな立場より仰望せられる來世は、あく迄現實的で、従つてその行業は數量が問題となり、美しさがきそはれ、期間が問題となる。しかもその故に難行難修となつて、造寺、彫佛、寫經、念佛と、まことに多彩である。法華の讀誦書寫のみならず、尊勝陀羅尼等密敎の諸呪が、念佛の行と同じ立場にて考へられる。即ち彼土得生は、善根によるとみる所、善根と考へられるすべてが、そこへ出て來るのは當然である。即ちこのやうな状態は、正しく善事をなすに堪へる人間性を認める所にあるといはねばならない。觀山山上に次第に深まり行く人間反省の事實は、彼等の上に顯著にみることは出來ず、即ちその信仰は、彼等の生活と生活意識の上に、最も具體的に形成されてゐるのを、みるのである。

和氣眞綱は邪惡はびこる世を憤り、源顯基は浮薄な人情を慨し、小槻兼任は「蜉蝣之世」(續本)といつてゐるが、この邊に、わづかに貴族階級に於ける無常觀的なものが、往生傳に於いては感ぜられるのみである。併し、自らの人間性に對する反省は、それを未だ認めることは出來ない。

附 所謂雜信仰について

さて、右の如く當代貴族の信仰形態は、その行に於いて難修である。これによつて多く平安時代は雜信仰の世といはれるが、果してさうであらうか。通觀する所、その行は難行であるが、信仰は、必しもさうではない。多くの行業は、西方信仰の場合、西方往生の一點に凝集せられるのである。由來、平安時代の佛教信仰特に貴族のそれでも、必しも彌陀信仰に限られるものではなく、或は彌勒信仰あり、或は法華信仰がある。併し、法華信仰の場合、多く究極

は、その法華の行業によつて西方に往生せんとするものの如くである。即ち法華信仰と彌陀信仰の混淆の形をとりながら、しかも目指される所は一である。併し、彌勒信仰と西方信仰は對立するやうであり、事實が多い。しかも當代の好尚は、これをも一なるものたらしめてゐる例がある。以下、藤原道長の場合をもつてこのことを明かにしたる。

從來、藤原道長の佛教信仰は、究極、西方信仰であつたとせられる（故橋川教授、井上光貞氏、家永三郎博士等）。果してさうであらうか。道長は果して西方信仰によつてその得道を期したのであらうか。

道長の西方信仰の具體相は、右の諸氏の諸論作でつきてゐるので、今こゝには、それを略するが、とにかく、畢世の行として法成寺を建立し、その無量壽院にこもつて念佛をつのり、寛仁五年（二一〇）の如き九月一日十一萬、二日十五萬、三日十四萬、四日十三萬、五日には十七萬遍に至つてゐる（御堂關白記）。そして最後には、無量壽院の中尊の御手

にかゝる來迎絲を持して命終してゐる。即ちこれだけをみれば、正しく道長の信仰は、西方彌陀にあつたといはねばならぬ。併しこゝに我々は、道長が寛弘四年（一〇七）八月、四十二歳の時、吉野金峰山に上り埋めた經筒の銘文を改めて熟讀したい。從來この銘文は、徒らに道長の雜信仰を實證する例に引かれるのみであつた。まづその前半を左に引用しよう。

南瞻部州大日本國左大臣正二位藤原朝臣道長、百日潔齋、率信心道俗若干人、以寛弘四年秋八月、上金峰山、以手自奉書寫妙法蓮華經一部八卷、無量義經觀普賢經各一卷、阿彌陀經、彌勒上生、下生、成佛經各一卷、般若心經一卷、合十五卷、納之銅篋、埋于金峰、其上立金銅燈樓、奉常燈、始自今日、期龍華晨、於是弟子焚香合掌、白藏王而言、法華經者、是爲奉報釋尊恩、爲下值遇彌勒親近藏王、爲弟子無上菩提、

先年奉_レ書、欲_ニ賽參_ニ之間、依_ニ世間煩惱事_一、與_レ願違、爲_ニ恐_ニ浮生之不定_一、且於_ニ京洛_一、供養先了、今猶所_ニ以埋_ニ於茲_一、蓋償_ニ初心_一、復_ニ始願之志_一也、阿彌陀經者、此度奉_レ書、是爲_下臨終時身心不散亂_一、念_ニ彌陀尊_一、往_中生極樂世界_上也、彌勒經者、又此度奉_レ書、是爲_下除_ニ九十億劫生死之罪_一、證_ニ無生忍_一、遇_中慈尊之出世_上也、仰願、當_ニ慈尊成佛之時_一、自_ニ極樂界_一、往_ニ詣佛所_一、爲_下法華令_ニ聽聞_一、受_中成佛記_一、其庭此所以奉_レ埋之經卷、自然涌出、令_下會衆_一咸_ニ隨喜_上矣、(下略)

即ち法華開結經併せて十卷、阿彌陀經一卷、彌勒上生、下生、成佛の各經各一卷、般若心經一卷都合十五卷、手自ら書寫してこれを銅篋におさめ、金峰に埋め、その上に金銅の燈籠をたて常燈を奉り、今日より始めて彌勒下生龍華三會の曉をまつ、而して法華經は、釋尊の恩を謝し、彌勒に遇ひ、藏王に親近して無上菩提を證せんため、阿彌陀經は、臨終に身心散亂せず、彌陀佛を念じて極樂世界に往生せんため、彌勒經は、九十億劫生死の罪を除き、無生忍を得て彌勒の出世に遇はんためであると。これだけ讀めば、まことに法華の信仰に彌勒信仰と彌陀信仰とが並在するが如くである。併しこの場合、最初の法華經は、釋尊出世の恩を謝し、彌勒に遇はんとするもので、次の彌勒信仰に攝せられる。すれば彌勒信仰と彌陀信仰であるが、彌勒にあつては、その出世に遇はんためといひ、彌陀では極樂に往生せんといふあたり、一見彌陀信仰であるかの如くである。併しこゝに平安時代の彌陀信仰の内容が問題となる。即ち先述する如く極樂往生は、決してそのまゝ成佛ではない。極樂に生れ、無生忍を得て、聞法修行、然る後成佛するのである。かくて銘文の次の文字を注意しよう。即ち仰ぎ願くば、彌勒成佛して、この金峰山に下生せられる時(當時金峯山は彌勒下生の所と信ぜられた)、自分は極樂よりこゝに往詣し來り、龍華三會の聽法の後、成佛の記を受けたのである。その時この庭に埋めた經卷は、自ら涌出して、會衆を隨喜せしめるであらうと。

即ち道長は、極樂に往生するのは、彌勒成佛出世を待つためであつて、自らの成佛は、彌勒佛に見へ、聞法することによつて果したいといふものであると解さねばならぬのではないか。即ち現世に於いて待ち得ず、當面の問題としては、とにかく無量壽の恵まれる西方極樂に往生すること、併し成佛は慈尊に依ること、これを道長の態度とすべきであらう。所謂彌勒信仰は、兜率の内院に生れて、彌勒の成佛をまちつゝ修行し、その成佛下生の時行を共にして龍華の聞法を果して成佛するといふのであるが、道長の場合、西方に往生して、彌勒成佛をまつこととなり、形式としては兩信仰が合躰されてゐる如くである。道長は、なほ治安三年(二〇)十月、五十八歳——それは死する四年前であるが——の時、當時、兜率の内院と考へられた高野山に詣でたが、その奥院に至り、廟前に念ずるに、戸開き、入定中の弘法大師が、そのすがたを現したといふ。いふまでもなく大師は、彌勒の化身と當時信ぜられてゐたものである。右のやうに平安時代の西方信仰は複雑である。實の所、簡單に上來西方信仰といつて來たが、果してすべてさうであるかどうか、疑問多いことを思ふのである。

因みに右經筒は、吉野金峰神社藏、元祿四年の金峰山寺本堂改修の際出土したもので、銅製鍍金、高さ一尺一寸五分、徑五寸二分、蓋の高さ一寸七分、徑五寸四分、現に東京博物館に陳列せられてゐる。銘文の全文は、日本國寶全集第八輯、大日本金石史第一卷等によられたい。

四 武士の彌陀信仰

一

當代に於ける武士の勃興は、中期以後に顯著である。正にそれは貴族と庶民の中間に位する存在であつたといへや

う。その棟梁は、多く中央貴族が地方に下つて勢力を扶植したものであるが、源平二氏はその中心的勢力であつた。源氏にあつて、任以來十二年、ひとへに奥州にあつて鬪戦した鎮守府將軍陸奥守賴義の事績が、「續本朝往生傳」にみへてゐる。賴義は、奥羽鎮定後、伊豫守に任ぜられたが、これは彼の生涯の一段落であつた。即ちそこで顧みるに

一生以_レ殺生爲_レ業、先當_二征夷之任_一十餘年來、唯事_二鬪戰_一、切_二人首_一斷_二物命_一

にて、所謂惡の連續である。即ち深く罪業を悔ひて堂を建て、佛像を安置して以後ひたすら念佛の生活をしたが、命迫まつた承保二年（一〇七五）、遂に出家、やがて死去した。瞑目の後、人々多くその往生極樂を夢みたといふ。編者大江匡房は、これを評して

定知、十惡五逆、猶被_レ許_二迎攝_一、何況其餘哉、見_二此一兩_一、大可_レ懸_レ特、といつてゐる。

賴義の場合、その生活が落ち付き、壽又晩年に及べば、未來の不安は漸く迫まつて来る。このやうな時、その未來を決定する今迄の惡業の存在は、まことに大きい。即ち、残された命力は、ひたすら、その惡行を覆ふ程の善事をなすことに注がねばならない。併し貴族の財力と閑暇とにあかした善行に比す時、いかにするとも、それは物の數ではなかつたのであらう。晩年の念佛生活は、全く問題にせられず、十惡五逆の名に於いて扱はれてゐるのである。たゞこの際、本人にとつてのその熱意は、そのやうな狀態の故に、貴族の比ではなかつたであらうし、その結果往生せば、十惡五逆猶救はれる事實を、いや應なしに信ぜしめることを、かくて武人社會が、次第に實證して行くわけである。

賴義の三男義光のことは、後拾遺往生傳にのつてゐる。彼は兄義家に従ひ、所謂後三年役に父と同じく奥州に苦戦

奮闘した。晩年、園城寺の裏に道場をたて、丈六佛像を安置し、每日法華經と往生要集を讀誦し、念佛一萬遍をつつた。大治二年^(二七)十月のはじめ、身に病を感じたが、念佛を怠らず、廿日に至つて、沐浴、淨衣を着て本尊に對し、手に定印を結び、口に念佛を唱へ、五色絲を引いて命終したといふ。

平氏にあつては、余伍將軍といはれた平維茂がみへる。貞盛の甥で、その養子となり、關東にその勇武をうたはれた。壯年時、源信に會ひ、その教化により毎日法華經を誦し、いかなる急事があつても、これを怠らなかつた。又例年正月六日より、天台三大部を讀むを常とした。源信に、その臨終に於ける往生の扶持を頼んだが、最後危急の際、源信赴き得ず、その代りに極樂迎接曼陀羅をおくり、これに對して往生の觀をなせと示した。維茂は歡喜して一心觀念、遂に禪定に入るが如くに命終したといふ。^(後拾遺中)

源信に於ける念佛の具體的な相をみる事が出来るが、素純な武人の信仰相も興なしとしない。

大和國葛下郡の清原正國は、少時より武藝を好み、惡として造らざるはなかつたが、年六十一歳に及んで出家し、其後、毎日念佛十萬遍を修して廿七ヶ年に至つた。寛治七年^(一〇)、往生を欣ばゞ高野の山に登るべしとの夢告を得て、直に上山し、かくて同年十月一日、衣を改め爐をさゞげ、西に向つて入滅した^(拾遺中)。

攝津國河邊郡の住人源傳は、重代の武士であつたが、平素、僧を敬まはず、經教も信じなかつた。然るに長承三年^(一四)、六十歳に至つて病に侵され、既に危急におちいつた。その時多年祕してゐた弘法大師の袈裟を取り出し、これを着用していふに、今より三十年前、一僧あり、常に念佛せよ必ず汝の罪障は消滅すべしと教へた。爾來、三十年毎日内心に於いて一千遍の稱名をしたが、全く人に知らしめず、表に、たゞ武勇のみを示して來た。今即ちこれをあらわすといつて、西に向つて稱念、心身亂れず、眠るが如く氣絶へたと^(後拾遺下)。

因幡國の一武士は、老年に至り罪を悔ひて出家した。死迫まるに及び、その山寺より女子を追ひ出し、病身を起して西に向ひ念佛したが、その高聲は山谷に轟いたといふ。(後拾遺下)

甲斐國の弓馬の士丹波大夫は、狩獵を事とし、土民の田畠を横領し、出學の利を貪るなど、その惡行は、あげて記し難く、しかも未だ佛法の名字をも知らず、全く無慚無愧なるものであつた。所が、漸く老年に及び、内に宿善あつたのであらう、死期を知り、百ヶ日を限つて十人の僧を請じ、法華經を轉讀せしめ、彌陀念佛を修せしめた。最後、十人の僧のうち六人は、例時を行せしめるために止めて、四人をかへし、それらの指圖をすべてなし終つて念佛し、心靜かに身亂れず入滅した。編者は、これに對し

十惡五逆之輩、最後念佛之力、猶得往生今謂之歟
といつてゐる(三外)。

二

以上み來つた所、武人は、その生活は多く無慚無愧である。併し一度目覺めるか、老齡至つて死期近づくかすれば、その故に來世の恐怖を一入強く感ずる。即ちそこで全生活をあげて往生行に没入するのである。それは自らの過去の惡行を自覺するが故に、その行は従つて力強い。先きにのべた貴族にあつての行業には、大凡かゝる自覺反省の強固な基盤がない。殺生に終始するその生活は、具體的事實として、自己を惡人と自覺せしめずにおかぬ。

このやうな現實が、自ら貴族とは一段と、その信仰生活を力ある、はげしい、眞劍なものたらしめて行くのである。

しかも、このやうな十惡五逆の輩が、目のあたり往生をして行く所に、念佛の力を信ぜしめる契機が生ずる。この

やうな状態は、併しながら次の庶民に至つて徹底する。即ち武人は、庶民に比せば、やはり、その生活の程度は高いといわねばならない。大たいの所その生活に苦しむことはないわけである。即ち一度目覺めれば、中には貴族と同じ難行難修の信仰生活を行ひ得るものが多いのである。即ち、なほ宗教生活の上に餘猶の存することを否むことは出来ない。

五 庶民の信仰形態

一

さて次に庶民の信仰を考へようとするが、それに先き立ち、その生活に於いて全く庶民的であつて、しかも宗教者である沙彌群について一應述べねばならぬ。

沙彌とは元來發心して佛門に入るも、未だ比丘として受戒せざるものを、いふのであるが、我國平安鎌倉の交に問題となるそれは、そうではなく、登壇受戒して一度は僧であつた者が、後、教界を脱して再び世路にかへり、妻子を具して塵世に生活するをいふのである。併し多くの場合、その僧形まで改めるものではない。このやうな沙彌達は、多く自覺的な精神傾向の故に教界を出るので、その宗教生活は概して眞摯であつた。

往生傳に現れる沙彌で、最も古いのは、有名な教信沙彌である。これは「日本往生極樂記」にみえる所であるが、併し實はこれは教信その人を語るのではなく、攝津國勝尾寺の勝如の事績を述べるについて、たま／＼語られたに過ぎない。即ち當時勝如は別庵にて十數年の無言の行をなしてゐたが、ある夜中、人あり、戸を叩いていふに、自分は播州賀古驛北邊に住む沙彌教信といふものであり、今日極樂に往生する。貴方が明年の今日迎を得られるので、それを

告げるために來たのであると。驚いた勝如は、明朝早速弟子を派してその眞偽をたしかめさせた。弟子が歸來していふには、驛家の北に竹廬ありその前に死屍があつて犬が群れてゐた。廬の中では老嫗と童子が泣いてゐる。聞けばその死人は夫の教信であり、昨夜往生した。教信は一生、雇用の生活をおくつたが、口より彌陀號をはなさず、ために人は呼んで阿彌陀丸といつたと。この報告を聞いて勝如は、自分の數年の無言の行が、教信の念佛に及ばぬことを知り、即ち山を下つて村巷に入り、念佛をすゝめ、正しくその期日に往生したといふのである。「極樂記」の教信は、これだけで年代も不明であるが、これより三十年あつた禪林寺永觀の「往生十因」では、同様の體載で、やゝ詳しくなり、勝如をおとづれた時期もはつきり貞觀八年(八六六)八月十五日夜といふことになつた。その後、「後拾遺往生傳」「今昔物語」等にも、このまゝで載せられたが、鎌倉期に入つて俄然流行し、時代の好尚も加はつて著しく變化した。即ちもとは興福寺の碩學、法相の名匠であり、妻子はなかつたことになる。これらには、時代的説話的發展が、そこにあつてそのまゝ信することは出来ない。とにかく賀古に住み、一生雇用の生活をして妻子を養ひ、ひたすら念佛をして死んで行つた教信を問題にすれば、いゝわけである。

以下、沙彌群年次が明かでないものが多いので、一應、往生傳にのせられた順序に従つて、述べて行く。

信濃國にゐた藥連には、一男一女があつた。一生阿彌陀經を誦じ、佛號を唱へて生活したが、その死期を子女に告げて、獨り佛堂に入り、來迎を得て往生した(極樂記)。

拾遺往生傳上の、鎮西の沙彌淨尊は特に有名である。彼は屠兒であり、牛馬の肉を食する旃陀羅の生活を送つたが、丑刻に至ると、沐浴、淨衣を着て持佛堂に入り、法華懺法を修し、妙經を誦し、念佛する。一夜の宿を求めた比丘に語つて曰く、まことに愚賤の身、無慚の極、今更今生の榮は求めない。が併し來世の苦しみはまぬがれねばなら

ぬ。檀越、親族の助けを望まぬ故、牛馬の肉を食して生をつなぐより外はないのだ、併し某月某日この世を去つて極樂に往生する、もし結縁の心あらば来るべしと。數ヶ月の後、その日其處に來つた比丘は、正しく來迎をうけて往生した淨尊夫妻をみたといふのである（拾遺）。

淨尊に關する記事は、割合に詳細である。牛馬の肉を食する屠兒の生活は、まことに愚賤無慚の極みであり、その故に罪業の深重は、何人にも否定すべからざる事實である。併し淨尊にあつては、これをなくして彼等の生は、つながらない。生きるためのぎり／＼の生活が、必然的に不可避免的に惡業を齎すのである。罪業觀と厭離觀は、現實の問題として、こゝに起らざるを得ないわけである。

美濃國の藥延は、頭髮二寸、俗衣をまとひ、魚鹿を殺してその血肉を食ふ。無動寺の僧縁あつて、その家に泊り、その所行をみて、このやうな惡僧もあるものかと驚きおそれたが、やがて夜半に及ぶと、この惡比丘は忽ち淨衣をつけて別堂に入り、懺法を修し、四弘誓を發し、法華を誦じ、念佛を觀行する。即ち僧にむかつていふに、まことに殺生放逸、無慚限りない生活である。併し誦經念佛は、怠らずして、ひとへに濁世を厭ひ、淨刹を欣うてゐると、この僧心に思ふやうは、たとへ、いかに誦經念佛するとも、鹿を殺し、魚を食ふ、これをしも往生の業といへるか、それより山にかへり日を送ること數年、承平年中（九三一—九三七）、沙彌藥延の往生を知り、不覺の涙を流し、疑の罪を懺悔したといふ（後拾遺中）。

全く先の淨尊と同じい状態であり、話の構成も同様である。たゞ僧の感懷が注意せられる。

伊豫國の圓觀は、世俗に交つたけれども、念佛を以て宗となし、ひとへに西土を欣ひ、寤寐にも稱名の聲を絶なかつた。寛平五年（一〇）八月十五日の夜半、妻子と離れて別室に入り、自ら火を放つて燒死した。時に京都の或人、夢

に來迎の行列に會ひ、伊豫國圓觀の來迎の儀であると告げられた。夢さめて試みにその實否をたゞした所、入滅の年月日全く相違する所なかつた（後拾遺上）。

奴袴君なる僧がゐた。これは年來盜殺を業とする極惡人であつたので、片足を切つて京の東の牢獄に禁ぜられた。赦免の後、その獄の西に庵室を建てゝ住し、これ迄の惡業を愧じ、今世の苦を厭ひ、ひとへに九品の淨刹を欣つた。日中の所作は、起きて四方を拜し、然る後念佛するより外はない。隣に修理職の案主が住んでゐたが、遂に自らこれを教化して、入滅往生をとげた（後拾遺下）。

これら沙彌達の求道は、すべて眞劍且つ眞摯である。その深い罪業觀は、現世厭離の心と共に觀念的でなく、生活の上より必然的に出て来る。しかも彼等は直接庶民の中にあつて、その宗教生活を行じ且つ導くことになるので、その庶民に與へた影響は、無視出來ないものがあるといわねばならぬ。

二

さて庶民としては、まづ「日本往生極樂記」に二人の女人の話が出てゐる。

一人は近江坂田郡のもの、毎年、筑摩江（米原）よりの蓮華を採つて彌陀佛に供養し、ひとへに極樂の往生を期したが、正しく命終の時、紫雲下つてその身にまつわつたといふ。

今一人は伊勢國飯高郡の一老女、月の上半はひたすら佛事につとめ、下半は世事を營む、佛事とは、郡中の佛寺に常に香を求めて供へ、春秋の期には花を捧げる、又僧侶には鹽、米、菓采を供養するなど、かうして西方への往生を願つたが、數年を経て罹病、正しく來迎の奇瑞を得て入滅したと。

共に、つゝましかかな庶民信仰表現の例である。

鹿菅太は江州淺井郡岡本郷の住人である。中年以後、狩獵を以つて業とした。嘉保二年(一〇九五)十月、急に發病、危急に及んだので、直に出家した。平常、何も修する所はなかつたが、この時にあたり、聲をあげて誦していふ「若有聞法者、無一不成佛」と。數聲の後、念佛してその氣絶へた。時に瑞相甚だ多く、人皆異相となした(拾遺)。

下道重武は、左京陶化坊の匹夫であつた。一生殺生を事とし、魚甲禽獸の類を、ひさいで活計をたてた。永長二年(一〇九七)、魚獵の節、急に左肘に痛を感じたので、醫に示すと不治の惡瘡であるといふ。即ち二人の僧を請じて除病、救済の法を修せしめたが、病漸く危急に及んだので、更に範順上人を招じ、禁戒をうけ、經教を聽かんことを請うた。受戒聞法の後、歡喜していふに、宅に資財なく、こゝにて滅をとれば妻子は迷惑する。如かず、出でゝ命終せんにはとて、衣をぬぎ、八條河原に赴いた。即ち、草をわけて簀をのべ、西に向つて坐し、彌陀號を唱し、曉に至て念佛の聲遂に絶へたといふ(拾遺)。

錦延行は、近江國野洲郡の住人である。一生の間、別に功德も修せず又惡事もなさず、その間、形の如き草堂をたて、佛像を安置して、たゞこれ供養した。併しその命終には、來迎を得て往生し、梨本の座主の夢に入つたといふ。寛德年中(一〇四四—一〇四五)のことであつた(後拾遺)。

紀吉住も江州野洲郡の農夫であつた。身に何の善根もなく、家に些の財もない、併し寢食の間をのぞいて、淨不淨を論せず、常に稱名念佛した。延久年中(一〇六九—一〇七三)、病によつて死期を知り、沐浴を終へて妻に助けられ、後園の樹下に至り、席を西にむけてそれに坐した。明曉行つてみれば、顔色變らず、眠るが如く凡に倚つて化してゐた。村里感ぜぬものはなかつたといふ(後拾遺)。

山城國山崎の住人武元は、晩年に及んで道心を發し、朝夕稱名を事とした。その聲は高大で、隣里、往還の人々隨

喜せざるはなかつた。平生、僧に會う毎に、命終の節の善知識たるを願つたが、大治四年(二九)九月、相集つた繼素の稱名の中に、奄として往生した(修新)。

佐伯成貞は、江州甲賀郡の者であるが、天性質直、好んでひろく慈悲を施した。少壯以來、念佛を稱し、一堂を建立し、諸佛を安置して供養につとめたが、來迎をうくべき夢告あり、身に何の徳行もない濁世の凡夫、この瑞運に會うこと信じ難いといつて喜んだ。保延二年(三一)十月、衆僧にかこまれ、彌陀佛を專念して安然として氣絶へた(修新)。

三

庶民の階級にあつては、その生活が多く艱難にして善行を修し得ぬ現實の故に、先きの武士、沙彌と同じく、その自己反省は自ら深まる。「濁世の凡夫」は、最も具體的な事實として、承認せられざるを得ない。しかも財乏しく、閑暇のないことは、その行を雜行たらしめず、自ら專修純一なものとする。そしてこのことは貴族の雜修多行な宗教的事實に對比され、特にそれをなし得ぬ悲しみの故に、一行一筋にひたすらつながり、最も眞劍なものたらしめるのである。

現實の苦難な生活は、庶民にとつては、宿世の因で如何ともしがたい。

此世ハコレニテ止ナムトス、後世ヲ助ケ給ヘ(今昔物語、卷十六、廿一話)。

即ち、せめて來世は、かゝる苦しみより救はれたいのである。この切實な願と堅固な自己把握、罪業觀は、こゝに惡人救濟、專修念佛の道を、自ら打ち開き出すのである。

源雅通は、性元來正直なるも、世事にひかれて多くの惡業を作り、春秋には狩獵によつて、殺生を事とした。即ち邪見放逸は、求めざるに至り、煩惱惡行は好まざるに集まる結果となつた。併し年少の頃より、ひそかに、深く唱念

した。かくて遂に命終したが、往生人であるとの評がたつた。すると友の一人はこれを信ぜず、雅通の一生は、殺生と詔曲に終始してゐる、何の善根によつて往生せしや、もしかゝるもの往生するとせば、殺生好むべし、邪見行うべしと、のゝしつた。時に一老尼あり、それに説いて曰く、直心の念佛は往生を得しめる。雅通は善根はなかつたが、この直心の故に往生したのであると。即ちその友はじめて疑惑を去り、信心を生じたといふ(拾遺中)。

藤原忠宗は、一の善心なく全く邪見邪惡の徒であつた。老年に及び、その心狂せるが如く、佛法を聞いてはこれを罵り、僧侶を見てはこれを讐敵視した。その危急に及んで、さすがに親族相はかり、強いて出家せしめた。併し僧を厭つて戒をうけない。いよ／＼僧を憎み、法を謗る。こゝに親昵の一僧あり、それをおさへて種々加持した所、やがて忽ち正念を催し、邪心を忘れ、落涙して過を悔いた。即ち頭をかたむけて法に歸し、手を洗つて口を漱ぎ、衣をとゝのへて身を正し、一心に念佛した。かくて數刻、遂に命終したが、みるものは、その往生を信じて疑はなかつた(後拾遺上)。

源賴義や甲斐の丹波大夫、沙彌藥延や下道重武等、それらは十惡五逆、些の善心なきの輩である。しかも疑ふべからざるその往生の事實の前には、自らその宗教的認識は、改まらざるを得ない。念佛に諸善萬行に勝つて功德ありと稱する事實が、うけがわれるためには、かゝる具體的な生活事實の集積が、存せねばならぬのである。

六 結

上來、平安時代の宗教的自覺過程と題し、まづ叡山の傾向をのべ、貴族の淨土教を語り、武士の信仰を記し、庶民の形態を考へ以てこの時代に於ける人間性把握の過程を述べて來た。かくて我々は、次代の淨土教の相が、既に末期

の武士、庶民の中に存することを認めざるを得ないが、併し、それらに於ける宗教的指導の根源は、やはり叡山に置かねばならぬことを思ふ。空也、千觀、源信、良忍並に直接生活を共にした多くの名もなき沙彌達、ひとしくそれらに導かれた事實から、目をふさぐことは出来ない。たゞ彼等は彼等の生活の上に、具體的に彼等自身の形をもつて表現したに過ぎないのである。更に深い罪惡觀も、かたい宗教的人間自覺も、貴族のけんらんたる善人的宗教生活の刺戟影響あつて、はじめてそれは形成され、深化するものであつたことを忘れてはならぬ。

何時の時代でも、階級はあつても、現實には、それら決して孤在するものでなく、常に一なる歴史的世界の中にある。それ／＼因となり、縁となり、互に影響し合ひながら、社會を形成し、時代の歩みを進めて行く。その全體的な觀察を缺いては、歴史的眞實は、遂に把握されないものであると思ふことである。